

圧痕レプリカ法による縄文時代の敷物圧痕の復元研究

著者	真邊 彩
ファイル(説明)	博士論文全文 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第22号
URL	http://hdl.handle.net/10232/21439

平成26年2月7日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 真邊 彩

学位論文題目

圧痕レプリカ法による縄文時代の敷物圧痕の復元研究

(Study on Print of ~~Wooden~~ Items by Impression Method Using Replica)

Woven

論文審査の概要

1. 本論文の目的

本論文では縄文時代南九州における編物底研究に圧痕レプリカ法を導入することで、編組技法だけでなく素材という視点を加えて検討を行っている。本論の目的は以下の5点である。①民具・出土編組製品研究により構築された編組技法の分類を基に編物底の形状を把握し、原体となる編組製品の特徴を把握する。②素材を重視した検討を行うために、実証的分析を可能とする痕跡の復元方法を構築する。③出土編組製品との比較から土器製作に用いられる編組製品の特徴をとらえる。④編物底から把握できる資料は、編組製品研究の中でどのように位置づけられるかを考察する。⑤編組製品の出土例の乏しい地域（本論では南九州地方）において、編物底研究が編組製品研究にどのように貢献できるかを検証する。

2. 本論文の構成

「第1章 土器に残る痕跡とその復元研究の意義」では、編物底を土器製作時に底部に敷かれた編物の圧痕と定義し、土器に残るさまざまな痕跡を分類している。これらの痕跡研究の持つ可能性と限界について整理した上で、九州地方における編物底研究の意義を述べ、上記の5つの本論文の目的を提示している。

「第2章 編物底の研究史と問題点」では、編物底と出土編組製品の研究史と問題点を

純に転用するのではなく、編組製品復元に適した手法を模索、開発している点は、申請者のオリジナリティとして高く評価できる。

ii) 圧痕レプリカ法の採用により、これまで肉眼観察や拓本によって行われていた編物底研究を、編組製品全体の研究に近いレベルで比較可能にした点が、評価できる。このことは編組製品の残存がよくない地域における編組製品の具体的検討を可能にした。

iii) 編組製品の実物が出土していない南九州において、圧痕レプリカ法による編物底の研究により、素材レベルでの地域差を抽出している点が評価できる。

(2) 問題点

以上のような評価すべき点を含んでいるが、分析方法の提示方法や、分析結果の表現方法において不十分な点があり、筆者の意図が明確に伝えられない点があること、また大量の資料に基づく分析結果は説得力を持つものの、その結果が、縄文文化研究の中で、具体的にどのような成果として還元できるかという点で、見通しレベルにとどまっていることが、今後解決すべき課題として挙げられる。

4. 総合評価

以上、いくつかの課題は残るが、圧痕レプリカ法という新しい方法を用いることで、これまでの編物底研究を編組製品資料全体の研究の中での的確に位置づけ、編組製品そのものが出土していない地域において編組製品研究が可能であることを示した点は、申請者の研究のオリジナリティとして高く評価できる。よって博士論文の基準を満たしていると判断する。

授与する博士学位 學術

論文審査結果 合

審査委員

主査

渡辺芳郎

副査

新田菜津

副査

森脇 広

副査

小畑 弘己